『まばたき』作・玉井秀和

○登場人物
男1：銭湯帰りの男、少年D（僕）（太宰・ダザイ）：玉井
男2：医者Bと夢泥棒（怪人二十面相）：川村
男3：医者助手Cと夢探偵（アケチ）：高野
女1：少女A：近藤

【0】

いつの間に舞台上に一人の男がいる。男1。
何もない空間である。それは夢の中なのである。目をつぶった世界。

男1「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」
女1声「まーだだよ」
男1「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」
女1声「まーだだよ」
男1「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」

・・・・・・・

男1「もういいかい？」

・・・・・・・

男1「返事がないのに耐えかねて、僕は恐る恐る目をあけた。ずるしているのがバレたら、怒られると思ったからだ。そしてゆっくりと眼をひらいたその先の景色には、誰もいなかった」

突如の暗転
救急車のサイレン
男2のところに担架を運んでくる助手（男3）と女1。
その担架には男1。

【起】（10分＝3000字）

【1-1】

男3「どいてくださいどいてください！　先生！　大変です！」
男2「どうした！」
男3「救急です！」
男2「患者の容体は」
男3「何とか一命をとりとめています！」
男2「出血の箇所は」
男3「眼です！　眼を潰したようです！」
男2「何故！」
男3「そんなのわかりません！」
男2「とりあえず手術室だ！」

大きくなるサイレン。
椅子に座らせられる男1。そして助手と医者。
そこは病室。

【1-2】影は少し見えているほうがいいかもしれない。
男1、目隠しをしている。

医者（男2）が指を動かしている。
患者（男1）の眼はそれを追っている。

男2「どうだい？」
男1「いえ」
男2「これは」
男1「うーん」
男2「こっちは」
男1「いいえ。見えません」
男3「見えてるじゃないか！」
男1「影は見えるのです」
男3「影が見えてるってことは光も見えてるってことじゃないか」
男1「そうなのですが」
男2「ぼんやりと見えるってことですね」
男1「はい。まるで水の中にいるみたいです」
男2「そうでしょう。あなたはまだ目覚めたばかりだ。目覚めたばかりの時はなんだか目の前がぼんやりする時は以前もあったでしょう？」
男1「まぁ」
男2「それと一緒です。あれはまだ夢の中にいるのです。夢の中では水中が見える。あなたはこれだけ長い間夢の中にいたんだ。しばらくぼんやりしていても仕方がないでしょう」
男1「そういうもんですか」
男2「そうです。徐々に慣れてくるでしょう。それでちょっと話は変わりますが、、その目はどうしたんですか？」
男1「この眼、ですか」
男2「えぇ。あ、いえ、話したくなかったら別に」
男1「いえ、別に、、、あの、わからないのです」
男2「わからない」
男1「はい」
男2「覚えてないと」
男1「はい。その時の記憶が、誰かに盗まれたかのように、ごっそりと無くなっているのです」
男2「盗まれた。誰に？」
男1「わかりません。犯人の顔を覚えていないのです」

男3、男2に耳打ちする。

男3「先生そろそろ、○○のお時間です」
男2「わかった。それじゃあダザイ君。今日でひとまずは退院だ。アケチ君。家まで送っていってやんなさい」
男3「え、嫌ですよ」
男2「なんでだ」
男3「僕は、先生の助手なんですよ。こいつのお手伝いじゃない」
男2「それもまた私の助手の仕事だというんだ」
男3「いや、違いますね。だってその間に先生の助手は出来なくなるわけですから」
男2「アケチ君（ビスケットをちらつかせる）」
男3「今日だけですよ」
男2「いい子だ」
男3「ったく先生は人を使うのがうまいんだから」

ビスケットをもらう。

男3「ほら、たって」
男1「あ」
女1「先生急いでください！」
男2「今行く！」

転換（脚立を家に見立てて）

【1- 3】

男3「1，2。ん？（そこは空き地）」
男1「ちょっと待ってください。鍵がありますんで」
男3「本当にここか？」
男1「2つめです」
男3「2つめ。1，2。ん？」
男1「どうかしましたか？」
男3「ん、いや、2つ目は俗に言う空き地だ」
男1「そんなはずはありません。あ、2軒目です」
男3「2軒目は分かってる！」
男1「ありました」
男3「鍵はある、、こっちか？」

男3、隣の家の鍵をガチャガチャやってみる。開かない。

男3「くそ」
男1「あぁ、たてつけが悪いんですよ」
男3「え、たてつ、いや、そういう問題じゃ」
女1「あの。なにか？」
男3「、、え？　あ、いや、、鍵を」
女1「泥棒さん？」
男3「いやいや、違いますよ」
女1「泥棒さんでしょう」
男3「違いますって、この人の家なんですよ」
女1「どこが？」
男3「ここが」
女1「私の家ですけど」
男3「そうなんですよ」
女1「泥棒さんね？」
男3「いやいやいやいや」
女1「ちょっとポケット、パンパンさせてもらうわね」
男3「違うんですって」
男1「どうしたんですか？」
男3「いや、別の人の家だったんだよ」
男1「どうして別の人の家を開けちゃうんですか」
男3「え、だって、2軒目ってどこだよ！」
女1「皆さん！　泥棒さんです！　町内会の皆さん！　泥棒さんです！」
男3「え、あ、ちょっと待ってくださいよ奥さん」
女1「あらやだ奥さんですって。私、結婚してるように見える？」
男3「えぇそりゃあもう」
女1「やっぱり泥棒さんね」
男3「違いますよ、なんですか」
女1「いいえ、泥棒さんよ。嘘つきだもの。町内会の皆さん！」
男3「ちょっとちょっと！」

隣の家のおばさん（男2）も出てくる。

男2「うるさいわボケ！　何さわいどんじゃい！　ケツの穴から指突っ込んで奥歯ガタガタ言わせたろかい！」
男3「ひえぇ！」
女1「吉見さん。泥棒よ泥棒」
男2「あら藤原さん元気してる？」
女1「元気元気。最近なんて元気が有り余ってるからエクササイズ始めちゃって、これよこれ」
男2「何それ何それ。エビフライ？　エビフライでしょそれ！」
女1「違うわよ！　魅惑のボディよ、魅惑のボディ！」
男2「エビフライと海老天の違い知ってる？」
女1「え、魅惑のボディの話は？」
男2「そんなのどうでもいいのよ。エビフライと海老天の違いよ違い」
男3「挟まってる！　家に挟まってる！」
女1「え、衣が違うとかじゃないの？」
男2「知らな～い」
男1「痛い痛い痛い痛い」
女1「え、知らないの？」
男2「知らないわよ、エビフライと海老天の違いなんか。一緒じゃないのあんなん」
女1「え、知ってるから聞いてきたんじゃないの？」
男3「家に殺される！」
男1「アケチさん！　何とかして！」
男2「知らないわよ。興味ないもん。エビフライと海老天の違い」
女1「私も興味ないわよ」
男2「ま、でも海老天のほうが好きなんだけど、私」
女1「エビフライでしょ」
男2「海老天よ」
女1「エビフライ！」
男1「ビスケットです！　ビスケット」
男3「ビスケットをどうするんだ！」
男1「あげたらいいんです！　こういう時はつまらないものをあげるもんです」
男3「で、でも、ビスケットは一つしか――あ！？」
男1「どうしたんですか！？」
男3「2つに増えてる！」
男1「さっきパンパンされた時だ。あの時に増えたんだ！」
男2「海老天！」
女1「エビフライ！」
男3「と、とりあえずつまらないものですがビスケットでもどうぞ！」

ビスケットを食べる。

女1「あら、美味しい」
男2「ホント、美味しい」
女1「ティーブレークしなきゃ」
男2「私もそんな気分」
女1「うん。じゃあまたね」
男2「うん。また」

扉がしまる。

【1- 4】

男3「ふ～。危うく家に押しつぶされるところだったじゃないか」
男1「2軒目だって言ったじゃないですか」
男3「2軒目たって、2軒目は空き地じゃないか！」
男1「そんなことないですよ！」

数を数える声が聞こえだす。（女1「ひと～つ。ふた～つ。みっつ」）

男3「ほら、そんな高いところにいたら危ないだろ」
男1「さっき、家と家に押されて上ってしまったんですよ！」
男3「気をつけろよ！　怪我されたら俺が先生に怒られるんだから」
男1「ちょっと待って！」
男3「なんだ？　腰が抜けて降りれねえってか？」
男1「しっ！　きこえませんか？」
男3「何が。奥さんがうんこする音でも聞こえんのか？」
男1「違います、ほら」
男3「何も聞こえねえよ。あんま登んなよあぶねえから」
男1「もっとこっちから――！？」
男3「危ない！」

男1、脚立を上ろうとし、バランスを崩して落ちる。
男3「うわ、ちょっと。大丈夫か？」
男1「えぇ、何とか。経験者張りの受け身を取れました」
男3「ちょっと勘弁してくれよ。先生、怒ると怖いんだぜ」
男1「誰だい？」
男3「先生だよ。よくわからんところでキレるんだ」
男1「君は誰だい？」
男3「ん？　なんに向かって喋ってんだい？　ダザイさん」
よく見ると、ぼんやりと少女が見える。
男1「少女だ」
男3「どこ」
男1「そこに」
男3「え？」
男1「そこだよそこ」
男3「いないぞ」
女1「あなたを、許してあげる」
男1「未だ夢の中にまばたきしたまんまの僕の眼には、一人の少女が映っていた」
ＯＰ
人々の叫びのような音楽
【承】（５０分＝１５０００字）
※ここで男の目が徐々に見えるようになっていく。
【2-１】現実　医者（男2）と男1、助手（男3）
診断室。
男1「夢の中に少女が見えるんです」
男2「幻想だ」
男1「目をつむると見えるんだ。そこに。はっきりと」
男2「病気だ」
男1「でも、見えるんだ」
男2「でも、君の眼はまだ見えてなんだろう？」
男1「そうです。まだ夢の中です」
男2「矛盾しているじゃないか」
男1「それが矛盾していないのです」
男2「いや、矛盾している。よぉく考えてみてくれたまえ」
男1「はい」
男2「少女というものは実在だ。これはいいね？」
男1「ええ」
男2「そして目は実在するものしか見えない。これもいいね？」
男1「はい」
男2「という事は少女を見るためには君の眼は見えていなければならない」
男1「ですが私の眼は見えていないのです」
男2「そうだろう？　矛盾だ！　矛盾だ！　おかしな話だ！」
男1「それが実際に起こっているのです！」
男2「人間は矛盾を内包した存在だとでもいうのか！」
男1「そうとしか言いようがありません」
男2「何をバカなことを。もし仮に少女が見えるんだとしたら、君の眼は見えているんだ」
男1「それが見えていないのです」
男2「それは、みえてないのではなく、みたくないのではないのか？」
男1「それは違う」
男2「だったら目が見えていないという証明をし給へ！」
男1「それは、、、できません」
男2「そうだ、できないんだ！　人にはできないんだ。自分が目が見えていない事の証明なんてできないんだ！」
男3「先生。そろそろ〇〇の時間です」
男2「ああ。失礼。少々取り乱した。とにかく手術に失敗はなかった。その幻覚も、いずれ治るだろう」
男2、ハケル。
【2-２】現実　男1と助手（男3）
男3「気を悪くしないでくれよ」
男1「いえ」
男3「先生はああ見えて、門外漢なんだ」
男1「どういうことですか？」
男3「眼は専門外ってことさ」
男1「ダメじゃないですか！」
男3「ダメじゃないさ！　人間、得意不得意は必ずあるもんだろ？」
男1「そりゃあ、そうですけど」
男3「責任感が強いお人なのさ」
男1「それがダメな方向に働いちゃってるんですよ」
やや間
男1「君は目を閉じている間の景色を見たことがあるかい？」
男3「ある訳がない。だって、目は閉じられているんだから」
男1「僕はある」
男3「少女が見えるんだろ？」
男1「そうだ。少女が見えるんだ」
男3「その正体を知りたいかい？」
男1「知ってるのか？」
男3「あぁ、知ってるさ」
男1「何なんだ？」
男3「そりゃ君。恋だね」
男1「恋？」
男3「そうだ。そりゃ恋だ」
男1「そうなのかもしれない。僕はあの少女に恋をしているのかもしれない」
男3「恋ってのは身を焦がすからね」
男1「身を？」
男3「しんどいこともあるってことさ」
少女がぼんやりと見え始める。亡霊の様である。
男1「身を焦がすってことは恋は炎かなんかの類なのかい？」
男3「そうだと言われている。恋は人を狂わすんだ。大火の中にだって飛び込んでいける」
男1「そんな馬鹿な」
男3「飛んで火にいる夏の虫ってわけさ」
男1「馬鹿みたいじゃないか」
男3「馬鹿になっちまうのさ」
男1「馬鹿になるのはまっぴらごめんだね」
女1「許してあげる」
男1「なんだって？」
男3「なにが？」
男1「ん。何か今言わなかったかい？」
男3「だから馬鹿になっちまうのさ」
男1「違うよ。その後だ」
男3「後？」
女1「あなたを、許してあげる」
男1「許す？　俺の何を？」

男３「許す？　何を言ってるんだ」
男１「え？」
女１「あなたを、許してあげる」
　男１、急に立ち上がる。
　踏切の音。
男３「どうしたんだ」
男１「少女だ」
男３「何言ってんだ」
男１「まばたきの少女だ」
男３「あいにくそこには誰もいないね」
男１「許す？」
女１「うん。あなたを、許してあげる」
男１「何を？　何を許すんだい？」
男３「ホントにバカになっちゃったんじゃないか？」

　少女はぼんやりと消えていく。
男１「あ、ちょっと」

【2- 3】夢

　電車の音。
男２「危ない！」
　男１、男２にとめられる。
男１「ちょっと何をするんですか！　離して下さい！」
男２「まだ若いのにそんなことをしちゃダメだ！」
男１「違います！　違いますから！」
　電車が過ぎる。
男１「あの子は」
男２「早まっちゃいけないよ青年」
男１「あなたのせいで見失ったじゃないか！」
男２「あのね！　私がとめなかったらね、ひかれてたよ！」
男１「それは、ありがとうございます。でも――」
男２「でもじゃなーい！」
　周りから有象無象が出てくる。
男３「でもやめろー！　人の発言に必ずでもっていうのやめろー」
女１「でもっていうの反対！」
男３「そうだそうだ」
　盛り上がる。
男１「何なんですか、この人たちは」
男２「でも反対デモの皆さんです」
男１「なんかややこしくなっちゃってるよ」
男２「もう、絶対に言いませんね」
男１「えぇ、もう言いません！」
　電車のアナウンスが鳴る。
アナウンス「2番線。ドアが閉まります。締まるドアにご注意ください」
男１「すみません乗ります乗ります！」
　発射する電車。
男１「あ」
男３「乗り遅れましたね」
男１「え」
男３「失礼」
　男３、男１の身体を虫眼鏡でじろじろと見る。
男１「何ですか？」
男３「いや、失礼」
　まだ、続ける。
男１「え、だから何なんですか？」
男３「失礼。凸レンズで月明りを集めて火を起こそうとしているところだ」
男１「ちょっと何やってるですか！　バカなんですか？」
男３「いや、探偵です」
男１「探偵？」
男３「アケチといいます」
男１「アケチ」
男３「えぇ、俗に言う名探偵の部類の探偵です」
男１「名探偵が自分のことを名探偵なんていうんですかね」
男３「名探偵が自分の事を「あ、自分大したものじゃないです」と言って謙遜する、そういったいかにも日本的な探偵は終わりを迎えた。そもそも探偵なんてものが、日本的じゃないのに、どうして日本的に謙遜する必要があるのだ。いいじゃない、名探偵は名探偵なんだもの。言っちゃっていいじゃない」
男１「それはそうかもしれませんが」
男３「君だって、もしパイナップル農家だったら美味しいパイナップルを作ってますって言うだろう？」
男１「そりゃ、自信があるのであれば」
男３「それと一緒だよ。私はおいしいパイナップルを作ってるんだ」
男１「自信があるんですか？」
男３「ちょっちゅね」
男１「ん？」
男３「こう見えても腕っぷしには自信があるんだ」
男１「そんなに」
男３「ちょっちゅね」
男１「え、具志堅さんなんですか？」
男３「アケチです」
男１「あ、ですよね」
男３「それで、私に何か？」
男１「何がですか？」
男３「何か困ったことがあるのでは？」
男１「え、そっちが急に引っ付いてきたんじゃないですか」
男３「私は名探偵です。私がいるところに事件はあるのです」
男１「事件。そういえば、家が、無くなっているのです」
男３「家が」
男１「私の家があったところが、この世からぽっかりと消えているのです」
男３「盗難事件というわけですか。他に盗まれたものは」
男１「私の頭の中もぽっかりと穴が開いています」
男３「かなりのやり手だ。犯人はどのような顔でしたか？」
男１「それが、覚えていないのです」
男３「覚えていない？」
男１「えぇ、浮かんでこないのです。のっぺらぼうです」
男３「そうです。その通りです」
男１「どういうことですか？」

男３「犯人はのっぺらぼうです」
男１「のっぺらぼう？」
男３「そう。犯人は顔が無いという顔を持っている。犯人は数多の顔を持っている。数多は数多へと拡散し、いずれはのっぺらぼうになる。二十面相は、二十一面相になり、二十一面相は二十二、二十三と増えていき、三十面相が三十一面相になった丁度その時、彼はのっぺらぼうになった。そうです、犯人は三十面相です」
　男１、倒れる。
　男３、受け止める。

【2- 4】現実

　男２、入ってくる。

男２「彼はどうしたんだ」
男３「わかりません。急に倒れて」
男２「夢の中ってわけか」
男３「彼は今何をみているのでしょう」
男２「夢は影の世界だ。@「薄暗い古代の影の棲家」だ」
男３「影」
男２「@「フーコーは、夢の中で時に観られるほとんど同種の心象の増加を、『願望』によるものとして解析」した」
男３「願望ですか」
男２「そうだ」
男３「目覚めたら聞いてみましょうか」
男２「聞いたって仕方がないさ」
男３「何故です」
男２「夢の中では注意が何者かによって奪われている」
男３「誰にです？」
男２「さぁね。二十面相か何かだろう。そして目覚めた時には@「夜の幻はすでに記憶の中で崩壊し去って、引き裂かれたわずかな霧の欠片となっている」のさ」
男３「@「似て非なる印象に過ぎない」ということですか」
男２「そうだ。夢の世界を基礎づけるのは論理ではない」
男３「なんです？」
男３「感情さ」
男３「先生は彼の言うまばたきの少女も、そのような幻想だとお考えですか」
男２「幻想だ」
男３「僕にはそうは思えない」
男２「というと」
男３「僕は彼が少女を見るところを目の前で見た。僕には彼の眼には何かが映っているとしか思えないんだ」
男２「彼にしか見えない世界があると」
男３「はい」

※@「」（ハブロック・エリス『夢の世界』）より

　看護師（女1）、入ってくる。

女１「先生、次の患者さんが待ってますよ」
男２「あぁ、今行く」
女１「急いでくださいね。患者さん待ってるんですから！」
男２「今行くって言ってんだろうが！　こっちの用事が終わったら行くんだよ！　急ぐも糞もねえんだよ！　終わったら行くんだよ！　例えば俺が今糞を我慢してたとするよ？　糞ってウンコな。いいか、ウンコだぞ！」
女１「はい。ウンコ」
男２「俺は今ウンコを我慢してるんだ。それで、お前が急かすから、急がなきゃって患者のところに行ったとしよう。ウンコ我慢しながらな」
女１「はい」
男２「そしたらどうだ。検診しながら俺の頭の中はウンコのことでいっぱいだ。心臓の音ききますねー。どっくん。どっくん。あ、ウンコしたい。やばいウンコしたい。あーウンコウンコ。あっち行けウンコ。どっか行けウンコ。「先生どうでしょう」「あーウンコですね」あ、やばウンコって言っちゃった！　ウンコって言っちゃったよ！　患者さんも「あ、この先生今ウンコって言った」って思ってるよ。どうする！　こうなったらどうする！」
女１「ごめんなさい」
男２「ブリブリブリブリブリブリブリ」
女１「きゃー！　ごめんなさいぃ！」

　看護師、はける。

男２「失礼。取り乱した。じゃあアケチ君。論理的に考えよう」
男３「はぁ」
男２「いいね。科学はウンコだ」
男３「ん」
男２「ん？」
男３「え、今科学はウンコだって」
男２「言ったか？」
男３「え」
男２「言ったか？　私が、科学がウンコだって？」
男３「え」
男２「言ったのか？　どうなんだ。君はそれをこの耳で確かに聞いたのか？　この耳で」
男３「いえ、聞いてません」
男２「そうだ。科学ってのは論理だ」
男３「その通りです」
男２「いいね。じゃあまず君とあの青年は同じホモサピエンスだ。そうだね」
男３「えぇ、間違いありません」
男２「そして君は、眼を閉じた後の世界を見たことがあるかい？」
男３「ありません」
男２「証明終了だ」
男３「先生――」
男２「簡単な三段論法だ。ソクラテスの時代から続く三段論法だ。彼もまた、眼を閉じた後の世界は見えない」
男３「ですが私にはそうは思えないのです」
男２「科学的な話をしよう。例えば残像だ」
男３「残像」
男２「@「我々が太陽とか何か他のまぶしいものを観た後で、かなり暫くの間続いて現れる、絶え間なく移り変わっていく残像」だ（ハブロック・エリス『夢の世界』）」
男３「少女は残像だというんですか」
男２「例えばの話だ」
男３「影送りってことですか」
男２「原理はな」

　看護師、そろりそろり入ってくる。

女１「先生ぇ患者さんが」
男２「もう済んだ」
女１「はぃ」
男２「どこに行く」
男３「〇〇の時間ですよ」

　男３、はける。

【2- 5】夢　男1と女1

　男1、目覚める。

女１「目覚めました？」
男１「あ、君は――――イテテ」
女１「まだ、あんまり動いちゃダメよ」
男１「僕はどうなってたんですか」
女１「踏切の近くで全裸で倒れてたのを、隣の藤原さんが連れて帰ってきたの」
男１「あぁ、全裸で。ありがとうございます」

男２、会釈。

女１「ほんと、夫がお世話になりました」
男２「いえいえ。構いませんよ」
男１「夫？」
女１「？？？」
男１「いや」
女１@「昨夜は酔って居られたのですか、それとも眠っていたのですか？」
男１@「どちらも少しずつだと思います」（@「」は『夢の世界』より）
女１「怪我がなくて何よりです」
男１「ん、全裸だったんですか？」
女１「えぇ」
男１「全裸ってあれですか、あの、全の裸ですか？」
女１「えぇ。ねぇ？」
男２「まごう事なき全裸でしたな」
男１「え、ってことは見られちゃってるんですか！？」
男２「何を」
男１「何をって、だから、その、あれですよ」
女１「おシンシンのこと？」
男１「イヤー。言わないでイヤー」
男２「それはなぁ。おリンリン丸出しだったから見てるよ。見てるというか、見えてたよ」
男１「君もご覧に？」
女１「えぇ、おランランを」
男１「イヤー」
男２「まぁいいじゃないかおカンカンを観られたくらい」
男１「何なんですか、ランランとかカンカンって。上野動物園のパンダなんですよ！」
男２「言われたら恥ずかしいかなっていう配慮じゃないか！　より可愛く表現しようって思ったんじゃないか」
男１「どうやったって可愛くならないんですよ」
男２「あのねぇ。言っとくけどおタンタンを見せてきたのは君のほうなんだからね！」
男１「それはそうですが」
男２「私は君が凍えると可哀そうだから連れて帰ってきたというのに、なんなんだね君のその言い草は。たかがおトントンを観られたくらいで」
男１「そうですけど」
男２「さっきからね、私たちの優しさをね君は踏みにじってるんだよ！」
男１「優しくしてくれなんて言ってませんよ！」
男２「あぁ、そうだ。これがいわゆるやさしさの押し売りだ！　私はね、いい人に観られたいんだ！　いい人に観られたくてしょうがないんだ！　もういい！　チンチンチンチン！」

男２、はけていく。
男２の「チンチン」が踏切の音になっていく。

女１「行かなくちゃ」
男１「行くって、どこに？」
女１「踏切の向こう側」
男１「だめだ、踏切の音がチンチンに聞こえる」
女１「また、会えるかしら」
男１「またじゃなくても今いくさ」
女１「ダメよ。踏切のこっちには来てはダメ」
男１「なんで」
女１「なんでも」

女１、踏切の向こう側に行く。

男１「踏切のそっちにはなにがあるんだい？」
女１「さぁ。何があるでしょう」
男１「何だいそれ。大体さ、踏切なんて後付けじゃないか」
女１「後付け？」
男１「そうさ、元はそこはひと続きだったんだ。それを勝手に分けてるだけさ」
女１「じゃあ、こっちもそっちもひと続き？」
男１「そうだろ」
女１「うん。そうかもしれない」
男１「いや、絶対にそうだね。こっちもそっちもひと続きさ」
女１「ありがとう。あなたを許してあげる」
男１「許すって、何を？」

女１、ぼんやりと消える。

男１「あ、ちょっと！」

【2-6】夢

電車の音。
男３「危ない！」

男１、男３にとめられる。

男１「ちょっと何をするんですか！　離して下さい！」
男３「まだ若いのにそんなことをしちゃダメだ！」
男１「違います！　違いますから！」

電車が過ぎる。

男１「あの子は」
男３「早まっちゃいけないよ青年」
男１「あなたのせいで――――アケチさん！？」
男３「久しぶり。私がとめなかったら危ないところだったよ」
男１「そうですけど、でも――――」
男３「でもじゃなーい！」

周りから有象無象が出てくる。

男２「でもやめろー！　人の発言に必ずでもっていうのやめろー」
女１「でもっていうの反対！」
男２「そうだそうだ。あ、お前また「でも」って言ったな！」
男１「ごめんなさい」
男２「もう絶対に言わないって誓ったじゃないか！」
女１「嘘ついたのね、泥棒さんね泥棒さん！」
男１「違います泥棒じゃありません！」
男２「あの時信じた俺はバカだったってのか！」
男１「違います違います！　もう言いませんから！」
男２「もう、絶対に言うなよ！」
男１「絶対に言いません！」

有象無象、去っていく。

男３「危ないところでしたね」
男１「危ないところでした」

男3「ダザイさん。いい知らせと悪い知らせがあります」
男1「いい知らせと悪い知らせ」
男3「どちらを先に聞きたいですか？」
男1「良い知らせから頼むよ。僕はソーセージは最初に食べちゃう派の人間なんだ」
男3「いいねぇ！　白米とよくわからんタレのしみ込んだブロッコリーが残っちゃうタイプの人間だね！君とは仲よくなれそうだ」
男1「それで、いい知らせってのは」
男3「三十面相が見つかった」
男1「本当ですか！　今すぐそこに向かいましょう！」
男3「まぁ待つんだダザイ君。作ってもらったお弁当は最後まで食べなきゃならない」
男1「そうでした。それで、悪い知らせってのは」
男3「いぼ痔になっちった」
男1「そんな、そんなことって。うそだぁ！　あんまりだぁ！」

男1、ハケル。

男3「あ、ちょっと待って。イテテテテ」

男3、お尻が痛い。

【2-7】現実　アケチが真相を探るシーン。

女1、男2、看護師として入ってくる。

女1「あー大丈夫ですか」
男2「大丈夫ですかー」
男3「いぼ痔が破裂しちゃって」
女1「あら大変。検査しないと」
男2「ちょっと失礼しますね」

脚立に頭をはめられて、お尻を出される。

男3「え、え」
女1「失礼しますねー」
男3「あちょっとちょっと！」
男2「あら。ビッグバン」
女1「宇宙の始まりね。ここから星が生まれ、生命が誕生したのね」
男2「ロマンねぇ」
男3「人のお尻でロマンを感じないでください！」
女1「治療しときますね」
男3「え、今ですか？」
女1「えぇ。こういうのってね、早くしないと悪くなっちゃうから」
男3「いたいですか？」
女1「まぁ、多少は。痛かったら手をあげてくださいね？」
男3「あ、それ意味ない奴。やっても意味ない奴」
男2「行きますねー」
男3「あ、ちょっとまだ心の準備が」
男2「失礼しますー」

男2、男3の肛門から腕を突っ込んで奥歯をガタガタいわせる。

男3「あああ！　やめてくださいやめてください！　肛門から腕突っ込んで奥歯をガタガタ言わせるのやめてください！」
男2「あーだいぶこってますねー」
男3「何が？　こってるって何が？」
女1「もう少しですからねー」
男3「痛い痛い痛い痛い！　手上げてる、手上げてる！」
女1「イエーイ！（ハイタッチ）」
男3「えええぇぇ！」
男2「抜きまーす」

男2、腕を引き抜く。

男3「ああああぁぁぁ！」
女1「はい。終わりましたよー。頑張りましたねぇ」
男3「え、あ、もう終わり？」
女1「えぇ。もう大丈夫ですよー」
男3「え、え、え」
女1「どうしたんですか？」
男3「え、あの、え、なんかまだ、あの物足りないっていうか、こう、まだ何かあるなーっていうか、あって欲しいっていうか。なんかその、お願いします」
女1「サイテー」
男2「罰ですね」
女1「ですね」
男2「左手、使わせてもらいます」
男3「え、え、右利きじゃなかったんですか！　左手にはどんな違いがあるんですか！」

男2、つっこむ。

男3「ぎゃあああ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

男2、奥歯を引き抜く。

男3「あー！　奥歯取れた―！」

男2、腕を引き抜く。

男2「はいどうぞー。下の歯なんで、屋根の上のほうに投げるといいですよ」
男3「僕の永久歯が」
女1「じゃあ、ちょっとカルテ書きますから待っててくださいねー」
男3「はい。カルテ、、、」
女1「えぇ。いぼ痔の」
男3「そうか、カルテだ」
女1「えぇ。いぼ痔の」
男3「カルテだカルテ。ありがとうございます！」
女1「えぇ。あ、まだ、痛いですよ！」
男3「ありがとうございます。イテテテテ」

男3、痛くて変な歩き方になりながらハケル。

男2「大丈夫ですかー」

男2、追ってハケル。

【2-8】夢　男1と女1

男1、出てくる。

@
女1「一本目、二本目、私の足。好き。きらい。きらい。すき。足が二本。だから夢。言葉を話す。全部夢。でも夢の中だから、私二本足だけど。ホントは脚なんかないのよ。ホントは水かきとえらがある」
男1「今でも脚はちゃんと二本あるように見えるけどね」
女1「これは夢の中だからよ。あなたは私の見ている夢よ。眼が醒めれば消えてしまう」
男1「これは驚いた。僕は君に眠られてしまっているのか」
女1「でも大丈夫。直ぐには目を覚まさないようにしてあげるから」
男1「どうして僕なんか夢に見たんだい。いち面識もないのに」

女1「面識はあるわ」
男1「いつ？」
女1「（笑う）見て。今にあの空に血の噴水が溢れ出す。私が夢のトカゲを殺して埋めると、必ず空で血潮が溢れだす。青は完全燃焼、赤は不完全燃焼」
男1「何を埋めたって？」
女1「黒いトカゲ」
男1「黒いトカゲ？」
女1「私は中庭を掘って黒いトカゲを埋めたの」
男1「そのトカゲってのは何なんだい」
女1「その黒いトカゲは私なのです」
男1「君自身？」
女1「悪い夢のトカゲを殺して埋めた。空に血潮が溢れだした。溢れても溢れても、どこへも行けやしない。夢だから。水が足りないから。青は完全燃焼、赤は不完全燃焼」
男1「青は完全燃焼、赤は不完全燃焼」
女1「何もかも、私の見ている夢よ。私は今眠っている。私は世界を眠っている。でも夢の中は水浸し。私はホントはおぼれた女、魚になりそこなった少女なのです」
男1「魚になりそこなったのかい？」
女1「水が欲しくてほしくて仕方なかった。私は宇宙を眠ってしまった。水が夢の内側を、洗ってきれいにしてくれた。夢の中に持ち込まれた新聞の三面記事は、現実では忘れられる。みんな現実の中では忘れられてしまう」
男1「僕は忘れない」
女1「いいえ、あなたもいつかは忘れてしまう」
男1「とどめておくことは出来ないのかい？」
女1「とどめておくことは出来る。でも、実態を伴わない記録は夢のものなの」
男1「じゃあどうやってとどめるんだ」
女1「じっとみつめるの」
男1「じっと？」
女1「ただ、じっと見つめて、瞼に焼き付けるのよ」
男1「影送りだ」
女1「瞳の中には硝子体の海が広がる。光は影となって硝子体の海を泳ぎ続ける」
男1「この目の前を飛ぶ黒い影は、硝子体の海を泳いでいるのか」
女1「影は光の夢なのよ」
男1「それじゃあ影送りしよう」
女1「影送り？」
男1「じっと見つめて数えるんだ。そしたら君は硝子体の海を泳ぎ始める」
女1「やっても後悔しない？」
男1「さぁね。君の夢だ、僕のじゃない。いやなら、目を覚ましたらいい」
女1「いいわ、やりましょう」
男1「いいかい。とおまで数えて空を見上げるんだ」
女1「うん。分かった。ひと～つ。ふた～つ。みっつ。よっつ。いつ～つ。むっつ。なな～つ。やっつ。ここのつ。とお」
@（以上、寺山修司『地球空洞説』より抜粋・改変）

【2-9】現実　カルテを探すが、ない。先生が持っていきましたよ。

男3、入ってくる。
男2、引っ付いてる。

男3「痛い痛い痛い痛い！」
男2「ちゃんとやんないと駄目ですよー」
男3「もういい！　もういいから！」
男1「お疲れ様でーす」
女1「お疲れ様でーす」
男3「お疲れ様です」
男1「仲良しですねぇ」
男3「違いますよ」
男2「あれなんですよ。さっき手術したからそのアフターケアを」
女1「仕事熱心ですねー」
男3「それよりカルテを探してほしいんだけど」
女1「誰のですか？」
男3「ダザイという患者さんの。ほら、眼を怪我した」
女1「あーはいはい。ちょっと待ってくださいねー」

女1、カルテを探す。

女1「あれ」
男3「どうかしましたか？」
女1「どこでしたっけ？」
男3「あると思うんだけど」

男2・3、女1でカルテを探す。

男2「ないねー」
女1「なんでだろ」
男1「ん？　なにが？」
女1「ほら、カルテが無いんですよ」
男1「え、誰の？」
女1「ダザイさん。ほら、眼の」
男1「あー。それなら先生が持ってったきりだと思うけどなぁ」
女1「あーそうでしたっけ」
男3「先生が？」
男1「うん。だいぶ前に」
男3「じゃあ今は先生が持ってるってことですか？」
男1「そうだと思うよ」
男3「ありがとうございました」

男3、ハケル。

【2-10】夢

でも反対デモの皆さん。

女1「でもっていうの反対！」
男2「でもやめろー！　人の発言に必ずでもっていうのやめろー」
女1「そうだそうだ」
男2「君もぼーっとしてないで、デモに加わり給え」
男1「え、いいですよ僕は」
女1「あれ。なんだ、君か」
男1「あ。君もデモを？」
女1「えぇ。私、人の発言に必ずでもっていう人が許せないの」
男1「わかります。よくわかります」
男2「君は2度も「でも」って言ったじゃないか」
男1「心を改めたんです。僕はもう二度と「でも」って言わない」
女1「良い心がけね」
男2@「いいかい青年。出来るだけのものを自分でとるんだ。そして、自分を他人の手に任せちゃあいけない。自分が自分自身のものになるという事、そこに人生の一切の妙味があるんだからね」
男1「間違いありませんね」
男2@「いったい自由を人間に与えるものは何か。君はそれを知っているかい？」
男1@「わかりません。なんです？」
男2@「意志だ。自分の意志だよ。欲するという事が完全にできたら、自由にもなれば、命令を下すこともできる」
男1「欲する」
女1「欲することはすべての夢の根源よ」
男1「私はあなたのことを欲していますよ」
女1「私を？」

男1@「えぇ、あなたは、依然として勝ち誇るものの如く、アポロンの馬車となって、私の魂の上を駆け巡っているんですから」（ツルゲーネフ『初恋』改変）
女1「詩的な人ね」
男1@「詩はいいです。この世にないことを言ってくれるから。そして、実際あるものより優れているばかりでなく、ずっと真実に近いものを聴かしてくれるから」
女1「この世にない事はいずれは忘れられてしまうわ」
男1「そうでしょうか」
女1「私が夢から目覚めれば、あなたは夢を忘れてしまう」
男1「忘れませんよ」
女1「そういうものなのよ」
男2「毒だなぁ」
男1「何がですか？」
男2@「毒ですよ。ここの雰囲気は君に毒ですよ」
男1「何のことですか？」
男2「さぁ、もう行きましょう。我々は忙しいんですから」
女1「えぇ」
男2「でもっていうの反対！」
女1「でもやめろー！　人の発言に必ずでもっていうのやめろー」
男2「そうだそうだ」

でも反対デモの人々、ハケル。
男3、出てくる。

男3「見つけた」
男1「遅いじゃないですかアケチさん」
男3「でも反対デモの奴らは」
男1「もう行っちゃいましたよ」
男3「追うぞ」
男1「なんで」
男3「あの男だ！　あの男が三十面相だ！」
男1「のっぺらぼうじゃなかったですよ」
男3「変装だ。三十面相は数多の顔を持っている」
男1「そうか、しまった」

男1、ハケル。

男3「あ、ちょっと待って。イテテテテ」

【2- 11】現実

男3、医者の部屋を探している。
暗闇の中、カルテの束を見つける。

男2「何か、見つかったかい？」
男3「先生」

やや間

男3「何故、これを隠していたんですか」
男2「人聞きが悪いな。ただ持っていただけじゃないか」
男3「彼には、ダザイさんには、いったい何があったんです？」
男2「君の手元にその全てが書かれているじゃないか」
男3「何なんですかこれは」
男2「ただのカルテだ」
男3「確かにそうだ、これはただのカルテだ。でもこれは、彼の失われた過去に関するカルテだ」
男2「だから、どうした」
男3「この記憶は、彼のものだ」

【2- 12】夢
男1「見つけたぞ、三十面相」
男2「なぁに隠れん坊をしているわけじゃないんだ。見つかったってわけはない」
男1「僕の記憶を返してもらおう」
男2「良いかね。ダザイ君。私は三十面相。泥棒だ」
男3「まずい、奴の言葉に耳を貸すな！」
男2「君は泥棒が盗んだモノを返すところを見たことがあるかい？」
男1「そんなのはない」
男2「そうだろう。証明終了だ。私は君に奪ったものを返さない」
男1「しまった完全な三段論法だ。非のつけようがない」
男3「耳を貸すなと言ったのに」
男2「そうだ。非のつけようのない三段論法だ。それに引き換え君はどうだ。まるで火のついたところに飛び込む夏の虫じゃないか」
男1「恋は身を焦がすのさ」
男2「済度（さいど）しがたい考えだ。虫は虫らしく草っぱらで夢でも見てればいいものを」

【2- 13】現実
男3「火傷、酸欠、頸椎損傷、呼吸困難、意識不明。これは事故じゃない」
男2「つまり？」
男3「おそらくは焼身、入水、飛び降り、首つり、薬の乱用」
男2「ということは」
男3「彼は、自殺常習者だ」
男2「いいね、アケチ君。科学的な推論だ。だが帰納法は帰納法だ。必ずしも真実ではない」
男3「そして彼は自殺を図る度、目に怪我を負っている」
男2「君はそれをどう考える」
男3「彼は、自分で目を潰したんだ」
男2「そうだ、それが事の真相だ」
男3「何故、彼にそれを言わないんです」
男2「言ってどうする」
男3「彼の記憶だ！」
男2「今、彼の頭にぽっかりと開いている穴は、自分がメビウスの迷宮にいることを忘れさせている。我々は、彼の穴に夢が流れこみ、夢がいずれ海になり、やがて星になるその時まで、待ち続ける以外に途がないのさ」
男3「穴を埋めることを彼が望んでいたとしてもですか」
男2「望むことが正しいとは限らんさ」

【2- 14】夢
男1「虫は虫でも緑の中で落ち着ちついちまっては虫の居所が悪いんでね。緑は植物の色さ。安心安全の色なのさ。僕は燃え盛る炎の中に飛んでく夏の虫さ。煩悩の怖さを悟ることができない愚かで阿呆な虫なのさ」
男2「緑が植物の色だって？　植物が緑だと誰が決めた」
男1「植物は緑だろう」
男2「いいや違う。それはお前の妄想だ」
男1「だって現に緑じゃないか」
男2「その植物は何故緑なんだ？」
男1「知ってるさ。葉緑体だ。植物は葉緑体を持っているのさ」
男2「そうだ」
男1「そしてその葉緑体で光からエネルギーを作り出すんだ。その葉緑体が緑なんだ」
男2「何故」
男1「緑のほうが都合がいいからだ」
男2「そうだ。緑のほうが都合がいいんだ。緑のほうがエネルギーをつくるのに都合がいいんだ」
男1「じゃあ植物は緑じゃないか！」
男2「太陽のもとではだ。この空に瞬いている星が太陽だけだと思ったら大間違いだ。この宇宙には数えきれないほどの星が金烏（きんう）の如き光を放っている」
男1「だから何だっていうんだ」
男2「赤く光る星もあるのさ」
男1「そりゃあるだろうね」
男2「赤い光の下では緑は都合が悪いのだ。赤く光る太陽のもとでは、植物は赤黒くなる」

男１「赤黒く」
男２「そうだ。血の色だ。お前の中に流れる、その血潮の色だ！」
　眼から血が噴き出る。
男１「あぁ！」
男２「どうだ、思い出したか！　頬に流れる熱い血潮の疼痛（とうつう）を！　赤銅色（あかがねいろ）に燃え盛る、血の涙の思い出を！」
男１「そうだ、僕だ。この眼を潰したのは僕自身だ！」
　ノイズ
女１「あなたを、許してあげる」
男１「君は、誰なんだい？」
　突如の暗転
　救急車のサイレン
　男２のところに担架を運んでくる助手（男３）と女１。
　その担架には男１。

【転】（２０分＝６０００字）６シーン（１シーン３分）

【3- 1】繰り返すが、テンポは早まっている。
男３「どいてくださいどいてください！　先生！　大変です！」
男２「どうした！」
男３「救急です！」
男２「患者の容体は」
男３「何とか一命をとりとめています！」
男２「出血の箇所は」
男３「眼です！　眼を潰したようです！」
男２「何故！」
男３「そんなのわかりません！」
男２「とりあえず手術室だ！」
　大きくなるサイレン。
　椅子に座らせられる男１。そして助手と医者。
　そこは病室。

【3- 2】目は治っている。
男２「どうだい？」
男１「はい」
男２「これは」
男１「はい」
男２「こっちは」
男１「ええ。全部見えます」
男３「治ったってことか？」
男１「光が見えます」
男３「光が見えるってことは影も見えてるってことじゃないか」
男１「そうなのですが」
男２「どうかしましたか？」
男１「少女が、少女が見えないのです」
男２「少女」
男３「まばたきの少女か」
男１「そうです。影の中では見えたのに、光の中では彼女を見ることが出来ないのです」
男２「おめでとう。君は長い間夢の中にいたんだ。それが晴れて目覚めたというわけだ」
男１「もう一度、彼女を見ることは出来ないのですか？」
男２「もともと君の幻想だ。そのうち夢にでも出てくるでしょう」
男３「少女はいったい君のなんなんですか？」
男２「アケチ君」
男１「どういう事です？」
男３「科学的に論理づけるとしたら、少女は残像だ。強い光を見た後で目に焼き付いた残像だ」
男２「アケチ君」
男１「どういうことですか」
男３「カルテだ。これが君のカルテだ」
男２「アケチ君やめ給え！」
男１「火傷、酸欠、頸椎損傷、呼吸困難、意識不明。どういうことですか？」
男３「自殺だ。君は何度も自殺を繰り返している」
男１「僕が、自殺を？」
男３「覚えてないか？」
男１「ええ。その記憶はまだ、夢の中で溺れたまんまです」
男３「何か少しでも覚えていないのか？」
男２「アケチ君。もういい加減にし給え！」
男３「すみません。行きすぎました」
　女１、入ってくる。
女１「先生ぇ」
男２「なんだ」
女１「あのぅ、〇〇のお時間です」
男２「あぁ、今行く」
　女１、男２、ハケル。

【3- 3】男１、男３
男３「すまない。熱くなりすぎた」
男１「いえ」
男３「家まで送っていこうか。今ならビスケット１枚で行くぜ」
男１「まだビスケットいるんですか」
男３「ビスケットは飽きないんだ」
男１「アケチさん。僕は自殺を繰り返しているんですか？」
男３「あくまで僕の推測だがな」
男１「何故、僕は自殺を？」
男３「それは分からない。何かあると思うんだ」
男１「少女は僕のことを許すと言っていた」
男３「許すって何を？」
男１「わからない」
男３「火傷、酸欠、頸椎損傷、呼吸困難、意識不明」
男１「原因は？」
男３「おそらくは焼身、入水、飛び降り、首つり、薬の乱用」
男１「焼身、入水、飛び降り、首つり、薬の乱用」
男３「何か、思い当たるふしはないのか？」
男１「青は完全燃焼、赤は不完全燃焼」
男３「なんだそれ」
男１「少女がつぶやいていた呪文だ」

【3- 4】先生が眼の門外漢だという事がバレる
　男２、女１、入ってくる。
男２「すみません。待たせました」
男３「待ちました。だいぶ待ちました。私がウルトラマンだったら帰ってますよ」
男１「セブン？　コスモス？」

男3「コスモス、コスモス」
男1「青色のやつね」
男2「まぁでも、あなたはウルトラマンじゃないんで」
男1「あらま」
男3「かっちーん。人は誰でもウルトラマンなんじゃないんですか？　誰でもウルトラマンになれるんじゃないんですか？」
男2「なれないでしょう。逃げ惑う人々がいてのウルトラマンです」
男3「心の話だよ。僕が言っているのは心の話！」
男2「科学的じゃありませんねぇ」
男3「なんでこうも医者っていうのは頭が固いんだろうね」
男1「私なんて頭の中、草原よ。地平線まで続く緑色の草原に、ラクダさんが歩いているの」
男2「ラクダは、どちらかというと砂漠地帯ですね」
男1「ひどい。いいじゃない。想像の中なら、何したっていいじゃない」
男3「そんな御託はいい！　早く検査し給へ！」
男2「えぇ。そうしましょう」
男3「まったく。困った医者だね」
男2「失礼します」

男2、懐中電灯で照らす。

男3「あ、まぶしい」
男2「動かないで」
男3「まぶしいまぶしい」
男2「硝子体が傷ついてますねぇ」
男3「え、硝子体が？」
男1「硝子体って何？」
男2「硝子体というのは、眼の中の硝子で出来た部分です」
男1「あ～」
男3「違いますよ」
男2「ん」
男3「硝子体っていうのは、眼球の内部の大部分を満たしている無色透明でやや固いゼリー状のものです。硝子体は水晶体とくっついていて、眼球の形を保つと同時に、入ってくる光を屈折させる役割をしているんです。ちなみに」
男2「ちなみに！？」
男3「硝子体は「しょうしたい」とも読むんです」
男2「しょうしたい」
男3「知らなかったんですか？」
男2「え」
男3「知らなかったんですか？」
男2「知ってましたよ」
男3「嘘ですね」
男2「嘘じゃないですよ」
男3「それも、嘘ですよね。あれ、僕の勘違いかな。嘘つきって医者の始まりだったかな？　泥棒の始まりだと思ったんですが、医者でしたっけ？」
男2「いや泥棒ですけど」
男3「そうですよね。という事はあなたは医者ではなく泥棒さんなんですか？」
男2「いや、医者です」
男3「いやいやおかしいじゃないですか。嘘つきは泥棒の始まりなんですよね」
男2「はい」
男3「で、あなたは嘘をついたんですよね。という事はあなたは泥棒じゃないですか。完全な三段論法です。非の付け所がない三段論法です」
男2「うるせぇなさっきから！　黙って聞いてりゃごちゃごやごちゃごちゃ下らねえ御御託並べやがってよぉ！」
男3「非の付けどころのない三段論法じゃないか」

女1、入ってくる。

女1「どうしたんですか？」
男2「こいつがよぉ！　論破したつもりでいるんだ！　下らねぇ論理でよぉ！」
男3「あなたが論破されて悔しいだけでしょう！」
男2「悔しくなんかないねぇ！」
女1「先生（連れて行こうとする）」
男2「私は今憐みの気持ちでいっぱいだ。憐みと悔しさだったら7:3で憐みだ！」
男3「悔しいが3もあるじゃないか！」
男2「捉え方の問題だろう！」
男2「私がそう捉えたんだ！」
男2「いつも正論正論正論だ！　お前が言ってるのはただの正論でしかない！　正論がいつも正しいと思うなよ！」
女1「先生」
男3「正しい論と書いて正論だろう」
男2「楽だなぁ、お前は。正論だけ言ってればいいんだから。ラクダさんだな、ラクダさん！　あ～私もラクダさんになりたいなぁ！　いいなぁラクダさん。知ってるか。ラクダさんは砂埃から目を守るために、瞬膜ってのを持ってるんだ！　どうだ、知らなかっただろう！」
男2「瞬膜というのは、まぶたとは別に眼球を保護する半透明の膜のことだ！　瞬きをするとき、目の内側から瞬間的に出てくる膜のことだ！」
男3「あ、あ、あ、あ、あ、バーカ、バーカ！　うんこ！　うんこバカ！　ブリブリブリブリ！」

男2、女1に連れていかれる。

男3「何なんだ、あのヤブ医者は。絶対、カスタマーサービスに電話してやる」
男1「まぁまぁいいじゃないですか」
男3「ここで一句」
男1「ヤブ医者の、嘘をついて、蛇を出す」
男3「お後がよろしいようで」

鹿威しの音。

【3-5】真相を探すシーン

火事だと発見するのはもっと後のシーン。ここはその繋ぎ。

男3「そうか、火事だ」
男1「何かわかったんですか？」
男3「帰納法は帰納法だ。必ずしも真実ではない」
男1「どういうことです？」
男3「僕は帰納法の罠に囚われていたんだ。この一連のカルテを見て、全部自殺だと思った。でもそれは真実ではなかった」
男1「じゃあ真実は」
男3「最初の火事だけ事故なんだ」
男1「事故」
男3「火事の後、君は自殺を繰り返しているんだ」
男1「どうして」
男3「これは推論ではなく僕の妄想だが、恐らく少女を見たんだ」
男1「少女を」
男3「燃え盛る炎の中で一人の少女を見たんだ」
男1「炎の中で？」
男3「そうだ。残像は、太陽とか何か他のまぶしいものを観た後で現れる。炎の中で焼き付いた影、それがまばたきの少女だ」
男1「少女は僕の何を許してくれているんだ」
男3「それは分からない」
男1「アケチさん。僕はもう一度少女に会いに行こうと思います」
男3「何をしに」
男1「僕の犯した罪を明らかにするために」
男3「どうやって」
男1「現実が夢の扉をノックする。夢が現実に翻る丁度その瞬間、意識の隙間が現れる。僕はその意識の隙間からするりと入ってしまうのさ」

男3「つまりは分からないってことか」

電話が鳴る。

【3- 6】電話が鳴りやまないシーン

男3「はいもしもし。こちらカスタマーサービスです。え、あ、先生が。この度は誠に申し訳ありませんでした（切る）」

この間にも次々に電話がかかってきている。

男1「はい。もしもし。まことに申し訳ございませんでした」

男2、女1入ってくる。

男2「何の騒ぎだ！」
男3「先生に関する苦情の電話が鳴りやみません！」
男2「貸せ。ウルセエ！（切る）」
女1「あぁ！　何してるんですか！」
男2「うるさい！　ワン切りだ！　ワン切りを続けるんだ！」
男3「それじゃ、苦情が増えるばかりです！」
男2「ワン切りを続けろ！　時間が立てば人は忘れていく！」

背景で、ワンギリを続ける。

【3- 7】男1夢に行く方法を発見するシーン

男3「一つだけ僕に案がある」
男1「何ですそれは」
男3「本当は誰にも言いたくないんだが、この際仕方がない」
男1「アケチさん」
男3「だが、かなり危険だ。覚悟を持ったほうがいい」

男3、奥歯を出す。

男1「それは？」
男3「俺は奥歯を失った」
男1「そんなに！」
男3「君に覚悟はあるか？」
男1「行きましょう。奥歯の一つや二つ、くれてやりますよ！」
男3「それじゃあ、ここを上るんだ」
男1「上に行くんですね！」

男1、脚立を登る。

男3「ダザイ君。ごめん！」

男3、男1にカンチョーする。

男1「ぎゃあああぁぁ！」

【3- 8】デモの人に、病院を燃やされる。火炎瓶投げつけられる。

でも反対デモの人たちが病院に乗り込んでくる。

男3・女1「でもっていうの反対！」
男2「何なんだね君たちは！」
女1「グノシーで読んだんですけど、眼の事についてそんなに詳しくないのに治療を施したんですか？」
男2「誰にでも得意不得意はあるものだ」
男3「質問に答えてください。不得意なのに治療を施したんですよね」
男2「でも仕方ないだろう！」
男3・女1「でもっていうの反対！」
女1「グノシーで読んだんですけど、硝子体のことを「しょうしたい」って読むことも知らなかったんですか？」
男2「漢字の読み方ぐらいいいだろう」
男3「質問に答えてください。硝子体の事を硝子で出来てるんだと思ってたんですよね」
男2「でもそれは」
男3・女1「でもっていうの反対！」
男2「せめて反論させてくれ！」
女1「グノシーで読んだんですけど、この病院では肛門への性的サービスが行われているんですか？」
男2「なんだそれは」
男3「質問に答えてください。それは気持ちいいんですか？　肛門科ですか？　肛門科に行けば一般でも受け付けてくれますか？」
男2「それは事実ではない。デマだ！」
男3・女1「でもっていうの反対！」
男2「言ってない！　でもって言ってない！」
男3・女1「でもっていうの反対！　でもっていうの反対！　でもっていうの反対！」

でも反対デモの人たち、火炎瓶を投げつける。

男2「何をやっているんだ！　やめろ！　やめろと言っているんだ！　やめろ！」

【3- 9】夢に行くシーン

階段（脚立）を降りる。そこは肛門科。

男3「ここだ！」
男1「肛門科じゃ」
男3「すみません！」
男2「はい？」
男3「治療をしてほしいんです」
女1「またあなたですか？　あなたの治療はもう終わりました」
男3「違うんです。この人です」
女1「あなたも痔？」
男1「え、痔？」
男3「そうなんです。とんでもない痔なんです」
女1「あら大変。検査しないと」
男2「ちょっと失礼しますね」

脚立に頭をはめられて、お尻を出される。

男1「え、え、アケチさん？」
男3「大丈夫、大丈夫」
女1「失礼しますねー」
男1「あちょっとちょっと！」
男2「あらー。超新星爆発の直前ですね」
女1「このままほおっておくと、爆発してブラックホールになっちゃうわ」
男2「ロマンねぇ」
男1「人のお尻でロマンを感じないでください！」
女1「治療しときますね」
男1「え、今ですか？」
男3「いいなぁ」
女1「えぇ。こういうのってね、早くしないと悪くなっちゃうから」
男1「いたいですか？」
女1「まぁ、多少は。痛かったら手をあげてくださいね？」

男1「あ、それ意味ない奴。やっても意味ない奴」
男2「行きますねー」
男1「あ、ちょっとまだ心の準備が」
男2「失礼しますー」
　男2、男1の肛門から腕を突っ込んで奥歯をガタガタいわせる。
男1「あああ！　やめてくださいやめてください！　肛門から腕突っ込んで奥歯をガタガタ言わせるのやめてください！」
男2「あーだいぶこってますねー」
男1「何が？　こってるって何が？」
男3「どうだいダザイ君。夢の中には行けそうか？」
男1「行けません！　全然行けません！」
女1「もう少しですからねー」
男1「痛い痛い痛い！　手上げてる、手上げてる！」
女1「イエーイ！（ハイタッチ）」
男1「ええええぇ！」

　カンカンカン（この音は踏切になっていく）。
女1「なんの音？」
男3「行けそうか？」
男1「全然行けません！」
男3「なら俺に代わってくれ！　頼む俺に代わってくれ！」
女1「火事よ！」
男3「火事！（腕を変に動かしちゃう）」
男1「ぎゃあぁぁぁ！」
女1「そこまで、火が来てる。急いで逃げないと！」
　男2、急いで腕を抜く。
男1「あああぁぁぁ！」
男3「ダザイ君！　急ぐんだ！」
男1「あぁあぁぁぁ」
女1「あなたを、許してあげる」
男3「何をしてるんだ！　急げ！」
男1「行けた」
男3「何が！」
男1「少女だ！　まばたきの少女だ！」
家が崩壊する。

【3- 10】
　除夜の鐘が鳴り始める。
男3「危ない！」
男1「ちょっと何をするんですか！　離して下さい！」
男3「まだ若いのにそんなことをしちゃダメだ！」
男1「違います！　違いますから！」
男3「ダザイ君。もうここは危険だ」
男1「どうしたんです？」
男3「夢が崩壊し始めた」
男1「崩壊！」
男3「夢というのは君の心にぽっかり空いた穴のことだ。それが形を保てなくなってきたんだ」
男1「どうして」
男3「君がこの穴の形を忘れて行ってるのさ。この穴に夢がたまり、それはいずれ海になり、やがては星になる。そして星はいずれ爆発する」
男1「爆発！？」
男3「超新星爆発さ！」
男1「爆発したらどうなるんですか」
男3「なかったことになるんだ。夢の大洪水はブラックホールに飲み込まれ、初めからなかったことになるのさ！」
男1「そうなる前に三十面相を見つけなくては」
男3「急ぐぞ！」
男1「遠いところから音が聞こえる。除夜の鐘の音なのか。やめろ！　この俺からなんの煩悩を奪っていこうというのだ。奪っていくな！　これ以上勝手に俺から奪っていくな！」

【転2】

【4- 1】現実
男3「先生火事です！」
男2「見たら分かる。早く逃げ給え」
男3「違います。僕は帰納法の罠に嵌っていた」
男2「まだ、そんなことを言っているのか」
男3「火事だけ事故だったんです」
男2「だからなんだ」
男3「少女は残像なんだ。ダザイは炎の中でまばたきの少女と出会っている」
男2「科学的な妄想だ」
男3「だから証拠が、何か証拠がいるんです」
男2「愚かだ。君は愚かだ！」
男3「人を傷つけることなく、真理を語ることが出来るのは、愚者だけに許された特権です」
男2「狂っているとしか言いようがない」
男3「僕らはプラトンの洞窟の人々だ。様々な物事を影だけを見て満足している。でも彼は、洞窟を出て物事の真の姿を見たんだ。僕たちは彼のことを狂人だという、でも彼から見たら僕たちだって狂人なんだ」
男2「アケチ君。三段論法だ。ソクラテスの時代から続く三段論法だ！」
男3「論争もないのに、どうして三段論法が必要ですか！」
男2「アケチ君」
男3「何かあるはずなんです。火事に関する何かが」
　男3、部屋を探す。
男2「アケチ君」
　男2、1枚の紙を出す。
　火事の情報。少女の情報。
男3「先生！？」
　男3、それを取る。
男2「火事現場から運び込まれたのはダザイ君一人だけだ」
男3「僕の妄想は妄想でしかないのか」
男2「だが、彼は燃え盛る家に飛び込んでいる」
男3「燃え盛る家に？」
男2「真理はいつも迷宮の中だ。哲学者も迷うギリシャの直線の迷宮だ」
男3「２つ目の家。この世からぽっかりと消えてしまったあの空き地だ！」

【4- 2】

男1、飛び出してくる。
男1「見つけたぞ、三十面相」
男2「なぁに隠れん坊をしているわけじゃないんだ。見つかったってわけはない」
男1「僕の記憶を返してもらおう」
男2「聞こえるか、お前に、あの鐘の音が。時代の終わりと始まりを告げる鐘の音だ。お前の穴が星になりだした。お前が穴の形を忘却しだした。もう、この記憶がお前のモノではなくなってきているのさ」
女1、現れる。
女1「あなたを許してあげる」
男1「君は、誰なんだい？」

【4- 3】
男1「すごい！　飛んでる！　やっぱり夢の世界だ、なんだって出来る」
男3、普通に追い越していく。
男1「でも遅い！」
男3「急げダザイ君！」
男1「どうやったら早くなるんですか！」
男3「走ればいいだろう！　なんで飛んでるんだ！」
男1「わかんないですよ！　なんで僕は、飛んでるんですか！」
男3「こっちがききたいよ！」
女1と男2、追い越していく。
女1「パパ。お空飛んでるよ」
男2「見ちゃいけません」
男1「恥ずかしい」
男3「私のほうが恥ずかしいよ」
男1「飛ぶってもっと夢のあるものだと思ってたんですよ。ライト兄弟みたいな」
男3「ライト兄弟」
男1「あいつらなんて、自転車屋さんですよ」
男3「自転車じゃ飛べないよ」
男1「そうです。だから羽根をつけたんです。それで飛んでった。だから、ライト兄弟だって夢に駆り立てられて空に飛んでいるんです。なのに僕は、こう、飛んじゃってるんですよ」
男3「いいじゃんか、飛べて」
男1「なんか違うんですよ。こう、飛ぶって大空に飛び出していく、空に落下していく感覚がロマンなのに、なんか、徒歩なんですよ、これ。なんなら徒歩よりもちょっと低いんですよ。これロマン無いよぉ」
男3「ロマンはいいから急ぎなさい！」

【4- 4】現実
炎の中、男2がぼんやりと浮かび上がる。
男2「熱心に求めて知ったことは、結局、知恵も知識も狂気にすぎないということなのか」
男3、空き地。
男3「一件目、二件目。ここだ。この空き地だ。この世から、ぽっかりと失われたこの空き地だ！」

【4- 5】過去火事の回想と夢が混ざる。
サイレン、踏切の音、電車の音は、組み合わされ、火事の音になっていく。
男1「通してください！　通してください！」
男2「危険です！　他の道を回ってください！」
男1「あの家なんです！　あの家は僕の家なんです！」
男3「危険です！　入らないでください！」
男2「あ、ちょっと！　君。戻りなさい！」
炎の中、男1は少女とであう。
女1「おかえりなさい」
男1「ただいま」
女1「あなたを、許してあげる」
男1「君は、誰なんだい？」
家が崩れる音。脚立が倒れる。

【4- 6】
三十面相とのシーン。
男2「お前は今何を夢見ている」
男1「少女の夢だ！」
男2「そいつは性欲だな」
男1「フロイトか？　あいにく僕はユンギストなんでね。フロイトはダメだ。直ぐチンチンと結び付けたがる」
男2「チンチン結構。コケコッコウ。お前にあるのは穴だ。それがお前のコンプレックスだ。お前は、自分の頭にぽっかり開いた穴にコンプレックスを抱いている。そしてそれを埋めてくれるものを探しているのだ」
男1「それはエディプスコンプレックス」
男2「オイディプスは自分の罪に気が付かない。気が付いているのは狂人だけだ」
男1「僕がオイディプスだというのか！」
男2「スフィンクスの謎を解きに来たんだろう？」
男1「僕の記憶を返してもらいに来たのさ！」
男2「君じゃだめだね。オイディプスは事実に気が付くと目を潰す」
男1「なぜ僕じゃダメなんだ」
男2「記憶ってのは水ものなのさ。器を欲する」
男1「器を？」
男2「人は虚栄心の塊だ。俺はここにいるぞっていうのを叫ばないと生きていけないんだ。その叫びは孤独からの脱却だ。人間の根源はみな同じ。孤独への圧倒的な恐怖だ！」

【4- 7】
女1「あなたを許してあげる」
男1「「許してあげる」その言葉が反響する。許して」
女1「いいよ、あなたを許してあげる」
女1は、残骸の下にうずくまる。誕生の形。死の形。

【4- 8】現実
アケチが脚立を一個ずつどかし始める。

【4- 9】夢

男１「除夜の鐘は忘却の音律だ。鐘の音は万人から煩悩を奪っていく。煩悩を悟ることが出来ない愚かで阿呆な虫どもから奪っていく。その音律は私そのものなのだ。バッカスの功徳のうちで最も大事なものは、心に積もる憂いを払う玉帚だという。だが、それもほんの束の間の夢。一眠りし酔いがさめれば、憂愁はアポロンの馬車によってたちまちに戻ってくるからだ。それに比べて除夜の鐘だ。この私だ。私が盗めばすべてを忘れる。二十面相は、二十一面相になり、二十一面相は二十二、二十三と増えていき、三十面相が三十一面相になった丁度その時、私はのっぺらぼうになった。数多は数多へと拡散し、いずれはのっぺらぼうになるのだ。穴に夢が流れ込み、夢がいずれ海になり、やがて星になる。そしてその星が爆発する時、星はブラックホールになるのだ。そこはすべてが飲み込まれる世界だ。光も影も夢さえも、無の大引力の中に吸い込まれてしまうのだ」
男１「この世は消えゆくむなしき幻影だというのか」
男２「そうじゃないか」
男１「違うだろう」
男２「盲目だ。あまりに盲目だ」
男１「生憎クピドは盲目なのさ」
男２「そのクピドの眼には何が見える？」
男１「少女だ。夢のまにまに現れる、まばたきの少女だ！」

【4- 10】現実

最後の脚立をどかし終え、少女を見つける。

アケチ「これは！？」

【4- 11】夢

男２「オイディプスは真相を知り、両の眼を黄金の留め具で突き刺した。天にはおぞましき黒雲立ち込め、深紅の雨が激しく大地を打ちつけた」
男１「大地を叩いた深紅の雨は、ブラックホールに赤黒い生命を芽吹かすのさ」
男２「お前は天に輝く星が金烏でなくてもよいと言うのか」
男１「玉兎（ぎょくと）もまた美しいじゃないか」
男２「シレノスの坐像を開こうというのか」
男１「その先にどんな運命が待っていようとも、オイディプスはスフィンクスの謎を解こうにはいられないのだ！」
男２「満月上るキタイロンの山々よ。時は満ちた。今こそオイディプスの真実を、ギリシャの直線の迷宮を紐解く時だ！」
男１「さぁ、返してもらおう僕の記憶。血潮にまみれた煉獄の記憶を」
男２「そこまで言うなら返してやろう。お前が欲した、暗き死神が呻き（うめき）と涙で支配する夢を。いいかオイディプス！　これがお前がまばたきした世界だ」

【結】（１０分＝３０００字）

【4- 11】

落ちてくる黒い物体・焼死体（少女）。
落下音が無限の空間に反響する。

男３「黒いトカゲだ」
男１「ゴムが焼けたような臭いがした。何とも身体に悪そうなあの臭いだ。天から舞い降りた黒いトカゲは、内側にとてつもない力が加わったように縮んでいた。引力だ。引力が働いたんだ。外と内を分ける境目が崩壊し、内側が外側に流れ出た。そして空っぽになった内側に無が流れ込んだ。無の大引力は身体を物凄いエネルギーで内側へと引っ張っぱり、黒いトカゲの夢をペシャンコに押しつぶしたのだ」
男２「もう、死んでいる」
男１「まだ、死んでない。この黒いトカゲは夢の中を落下したまんまだ。まだ落下途中なのだ。誰かが夢を醒まさなければならない。この夢を、誰かが醒まさなければならない」
男２「誰が醒ますんだ」
男１「僕だ。これは僕が夢見ている世界だ」

やや間

男１「許して（ぽつりと出る）」
女１「いいよ、あなたを許してあげる」

傍らには少女がいる。

男１「人は、忘れてしまうのですか？」
男２「忘れたことさえ忘れてしまう」
男１「そんなのいやだ」
男２「どうしようもないことだ」
男１「どうしようもなくったって、どうしようもなくったって、どうにかしたい時があるじゃないですか」
男２「君の穴は星となり、やがて星は爆発するんだ」
男１「とどめておくことは出来ないのですか？」
男２「とどめておくことは出来る。だが、実態を伴わない記録は死者のものだ」
男１「じゃあどうやってとどめたらいいんですか」
男２「記憶するんだ」
男１「記憶」
男２「じっと。ただ、じっと見つめて、瞼に焼き付けるんだ」
男１「瞼に」
男２「要は影送りの要領だ。じっとそれを見つめるだけだ。そうすれば、光は影となって、瞼の裏に焼き付く。影は光の証明だ！」
男１「あ。あ」
男２「さぁ、じっと見つめるんだ」
男１「あ。あ」
男２「眼をつむった世界ではこれ以上眼をつむることなど出来やしない。目に焼き付けろ。奪われないように。もうこれ以上、除夜の鐘にも奪われないように」
男１「あ。あ」
男２「見つめろ」
男１「あ。あ」
男２「見るんだ」
男１「あ。あ」
男２「見ろ！」

男１、嘆きの音。
踏切の音がなる。

女１「行かなくちゃ」
男１「うん」
女１「また、会えるかしら」
男１「うん」

女１、踏切の向こう側に行く。

男１「踏切のそっちには何があるんだい？」
女１「さぁ。何があるでしょう」
男１「なんだいそれ。大体さ、踏切なんて後付けじゃないか」
女１「後付け？」
男１「そうさ、元はそこはひと続きだったんだ。それを勝手に分けてるだけさ」
女１「じゃあ、こっちもそっちもひと続き？」
男１「そうだろ」
女１「うん。そうかもしれない」
男１「いや、絶対にそうだね。こっちもそっちもひと続きさ」
女１「ありがとう。あなたを許してあげる」
男１「うん。ありがとう」

女１、ぼんやりと消える。
男１、追わない。

男1声「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」
女1声「まぁだだよ」
男1声「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」
女1声「まぁだだよ」
男1声「ひとーつ。ふたーつ。みっつ。もういいかい？」

溶暗していく

・・・・・・

男1「もういいかい？」

完全な暗闇の中

男1「みいつけた」

静寂の中に少女の残像。

（完）